

ラオスを知る・調べる

石井美千子

CLMVとして注目されている後発ASEAN諸国のなかでラオスは目立たない存在といえよう。しかし、ラオスへの関心が高まりつつあるのは、書籍やインターネット情報が増加していることから伺える。そのなかから、これからラオスについて知るための本や、ラオスについて調べるときに役立ちそうな本や情報を紹介したい。

ラオスという国を知るための入門書としては、菊池陽子・鈴木玲子・阿部健一編著「ラオスを知るための六〇章」(明石書店 二〇一〇年)が読みやすい。自然から文化までカバーする六〇章に、ラオスを知るためのブックガイドも付いている。さらに詳しい概説書が、ラオス文化研究所編「ラオス概説」(めこん 二〇〇三年)である。五六六ページの大冊でデータも豊富。巻末には人名、地名、および事項別索引がある。

Martin Stuart-Fox
"Historical dictionary of Laos" (Scarecrow Press,

ド 二〇〇九年版) (国際機関日本アセアンセンター 二〇〇九年)は、投資関連の法律や制度が具体的に解説されている実務用の手引書である。

ソ連でペレストロイカが提唱された翌一九八六年、ラオスでも「チンタナカーン・マイ(新思考)」が提唱され、市場経済化への道が始まる。ラオスの市場経済化について多角的に研究した成果が天川直子・山田紀彦編「ラオス一党支配体制下の市場経済化」(アジア経済研究所 二〇〇五年)である。また、「チンタナカーン・マイ」に関する初の本格的な研究が山田紀彦編「ラオスにおける国民国家建設―理想と現実」(アジア経済研究所 二〇一一年)で、本号の特集はその成果を紹介するものである。

ラオスの経済開発を知るためには、メコン経済圏に関する文献も見る必要がある。これについては、本誌のメコン地域国境経済の特集号(二〇一〇年一〇月号)のレファレンスコーナーで「メコン地域開発の関連資料」を紹介しているのので参照されたい。最新出版物には川田敦智著「メコン広域経済圏…インフラ整

備で一体開発」(勁草書房 二〇一一年)がある。

ラオスでは多くのNGOが開発協力に従事している。NGOの活動状況や問題点をスナップの目をとおして知ることができなのが、新井綾香「ラオス 豊かさ」と「貧しさ」のあいだ 現場で考えた国際協力とNGOの意義」(コモンズ 二〇一〇年)である。

上述の「ラオス史」を発行しためこんはこの一〇年ほどの間に続々とラオス関連書籍を出版している。そのなかからごく最近のものだけ追加しておく。二〇〇八年には野中健一編「ヴィエンチャン平野の暮らし 天水田村の多様な環境利用」、横山智・落合雪野編「ラオス農山村地域研究」と、農業や農村に関する書籍が発行されており、二〇一〇年には、ラオス人自身の著作の翻訳が二冊発行された。カム・ヴォーラペット/藤村和弘・石川真唯子訳「現代ラオスの政治と経済」は、パリ在住の国際的ビジネスマンが執筆したもの。プーミー・ヴォンヴィチット/平田豊訳「激動のラオス現代史を生き抜く回想のわが生涯」は、ラオスの副首相や国家主席代行を務め

たプーミーの回想録である。ラオスの言葉IIラオ語に関する興味深い著作が、矢野順子「国民語が「つくられる」とき―ラオスの言語ナショナルリズムとタイ語」(風響社 二〇〇八年)である。タイ語とよく似たラオ語だが、ナショナルリズムの発場としてタイ語とは異なるラオ語の正書法が確立された歴史が綴られている。

最後にインターネット情報を紹介する。アジア経済研究所の「アジア動向データベース」は、一九八六年以降の政治経済の重要日誌、主要統計、国家機構図などを掲載する。(直近五年は賛助会員限定)。リンク集では、海外移住情報の「ラオス情報サイト一覧」が充実している。政府機関、統計局、査証情報、新聞、税関、ラオス商工会議所等とリンクしている。「ラオスのビジネスを読む」は、在ラオス日本人ビジネスコンサルタントが発信する現地情報。以上URLは割愛したが、コンテンツタイトルで容易に検索できる。

(いし) みちこ/アジア経済研究所 図書館

63 アジ研ワールド・トレンド No.200 (2012.5)